

諸見里 聰

1. 要 約

- 術、管理指導を実施した。

2. 事業の経緯と背景

しており、62年度は前年度の $\frac{1}{2}$ に激減している（図-1）。そのため、シャコ貝価格は急騰して

てきた。

3. シャコ貝放流指導の目的

シャコ貝を放流することにより、漁業者の漁場管理意識を養成する。

シャコ貝放流適地の検討。

[illegible]

シャコ貝資源を回復させる

4. 构造策略提升方法

中城1 5,000 埋込法 4/19 25人 パッチリーフ

5. 結果と考察

①中城 貝の生残率は高い。場所により食害が多い部分もある。(完全に定着してからの食害であり、ヒメイトマキボラ等の肉食性貝類によるものと思われる)

貝の成長は比較的早い。調査区では放流から1年10カ月で平均殻長が40mmを越えた(図10-6-2)。

②本部 ハマサソギ製の円柱型人工基質で中間育成したシャコ貝とエアードリルで穴をあけた所へそのまま入れる方法との2つの方法が実施された(埋め込み法の改良型、便宜上、ドリル法と呼ぶ)。どちらの方法も生残が良好である。中間育成は県栽培漁業センターのタンクを使用した。

瀬底地先の生残率はセメント人工基質法では19%で、ドリル法では75%であった。また、ドリル法で埋め込んだシャコ貝の成長は明らかに早いことが認められた。

③恩納 歩留りは未調査であるが、殻長測定の結果、平均の殻長は18.1mm、最大21.7mm、最小14.8mmであった。

④伊江 貝の歩留りが約30%である。ここは埋め込み当初からベラ類による食害が多く見られたので、それが減少の要因と思われる。

⑤久米島 貝の歩留りは5%以下と最悪である。以前は天然貝が多く見られた場所ではあるが、放流貝はほとんど残らなかった。魚やカニの多い場所であり、食害による減少と思われる。その他の地域については未調査である。

今後の指導

① シャコ貝の放流では、これまで最大のネックであった作業効率の低さという点がドリル法により解決の方向にある。埋め込み法では70個/人時程度であるがドリル法では、300個/人時以上が可能である。

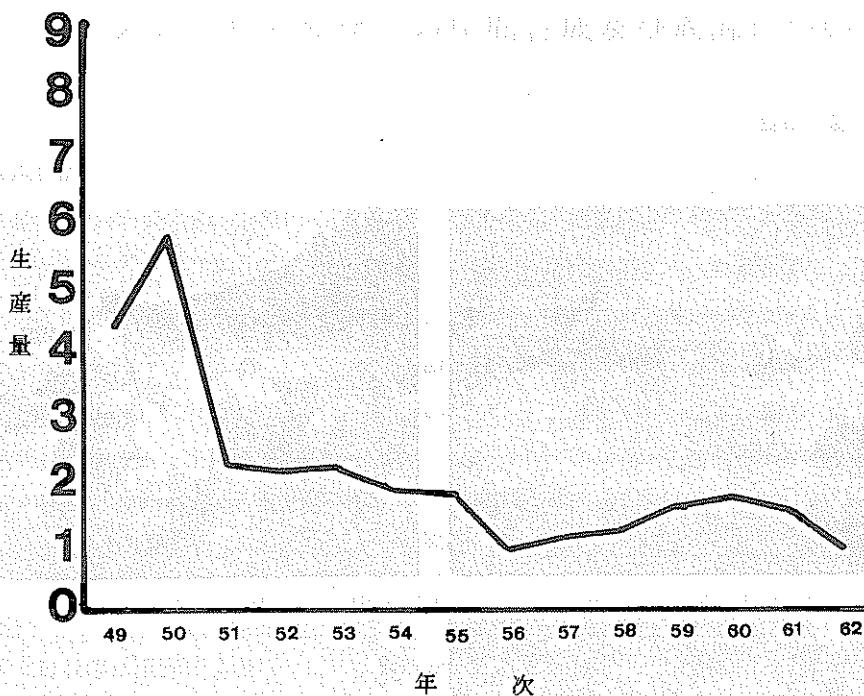
しかし、ドリル法で放流するシャコ貝は8mm以上の大きさでないと作業や貝の活着に問題がある。そのため、中間育成により貝を大きくするための施設や、貝に繁茂する海藻除去作業が必要となるのでその指導を進めていかなければならない。

② 久米島や伊江島など、捕食圧力の強い、生残の悪い海域での試験を実施し、ネットかけ等の対策で効果があるか実証する必要がある。

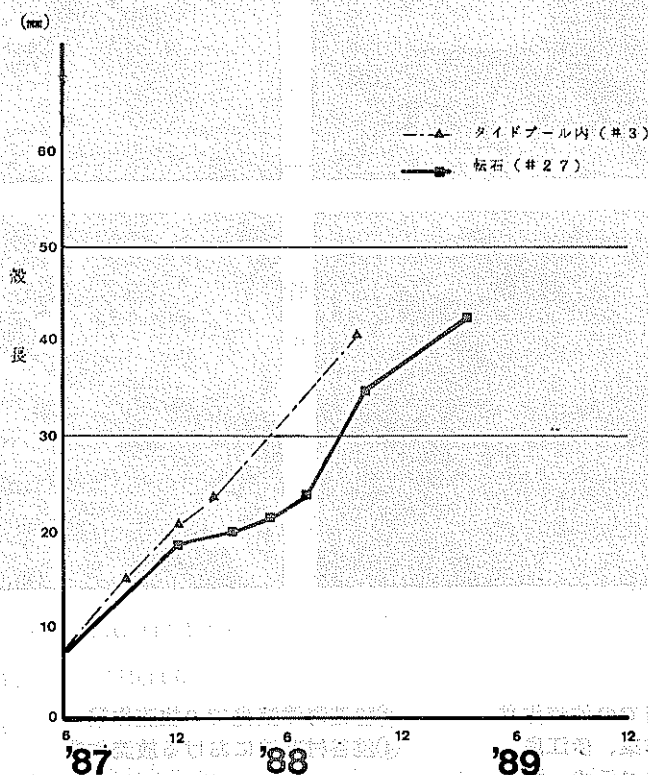
③ シャコ貝の中間育成、放流、管理等の作業コストや機材費等を詳細に調べ、シャコ貝放流事業の経済性を明確にする。

④ 放流区域は当面、天然の種苗供給基地として保護、管理していく必要があり、漁協内の同意を得て管理していかなければならない。そのためのグループ育成、他の組合員、地域住民への協力要請をしていき、放流貝の保護についてコンセンサスを得る必要がある。

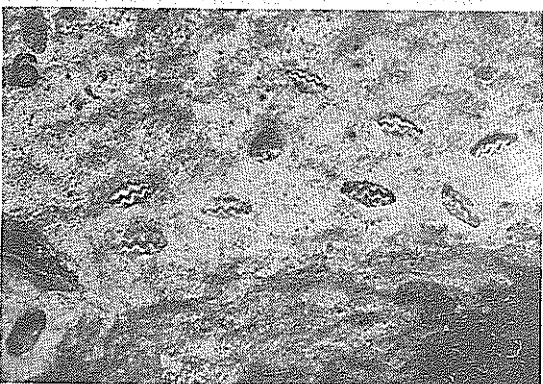
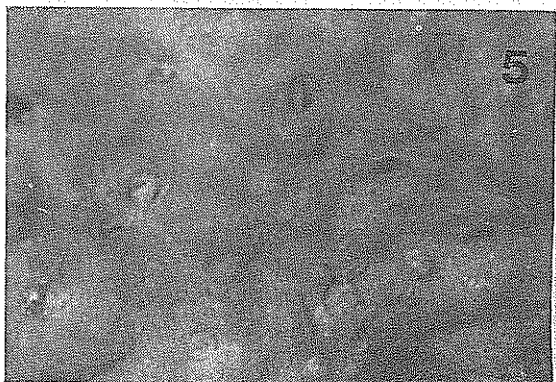
(100トン)



図一 1 シャコ貝の年次別生産量の推移 (殻付き)



図一 2 中城における放流シャコ貝の成長



＜写真の説明＞

①久米島ウガン崎での放流作業

②勝連町津堅島での放流作業

③水中での放流作業、伊江島

④読谷村残波における放流作業

(枠内は食害魚ベラ的一种)

⑤人工基質法で放流したシャコ貝、本部

⑥活着したシャコ貝、中城